

# 幕内瓦版 第拾六号

電子版 発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

## ■2012年 新年度にあたり 日本劇場技術者連盟 理事長 齋藤 譲一

昨年、連盟の皆さんに習ってフェイスブックを始めました。皆さんからの近況や、いろいろと貴重な情報やご意見をいただき、人と人のつながりの温かさを改めて感じています。とくに、美しい地球の写真を載せ『このままであってほしい』という八板副理事長の冒頭のメッセージには、全く同感させられております。21世紀、世界各地を襲う異常気象が続き、地震、洪水、台風、豪雨、竜巻、落雷のみならず、さらなる天災が地球を覆う可能性も高いといわれています。それでも人間はお互い助け合い励ましあって生きていかねばなりません。

日本劇場技術者連盟としては、これまで劇場技術者のステータス向上のため、舞台創造のため着実な歩みを記してきました。新年度は更なる不況の影響のなどで厳しい現実が待ち受けているかもしれません。皆様の英知の結集と、より一層の深い絆で前向きに乗り切って行きたいと願っております。

## ■ 第6回通常総会報告

日本劇場技術者連盟第6回通常総会が、平成24年4月16日(月)、新宿文化センター和会議室で開催され、以下の議案が承認されました。

### 第1議案 2011年度事業報告

1. シンポジウム「この時だから考えよう、劇場の危機管理と省エネ設備」  
開催日：2011年5月16日(月)、会場：新宿文化センター和会議室
2. 製作現場を見に行こう「衣裳編」  
開催日：2011年6月13日(月)、会場：東京都荒川区東日暮里  
衣裳デザイナーとして幅広く活躍されている宮本宣子さんの制作現場「宮本宣子ワークショップ」を見学。
3. 第1種/第3種劇場技術者検定講座の大阪開催  
開催日：2011年7月28日(木)～29日(金)、会場：大阪・貝塚市コスモシアター  
講師：海道裕之、児島章一、前川幸豊、八板賢二郎  
共催：財団法人貝塚市文化振興事業団
4. 裏方教養講座[日本で演じられてきた演劇たち]  
開催日：2011年7月29日(金)、会場：大阪・貝塚市のコスモシアター  
講師：八板賢二郎、共催：財団法人貝塚市文化振興事業団、一般社団法人日本音響家協会西日本支部
5. 劇場技術者談話室「映画館(ムービーシアター)の現況」  
開催日：10月17日(月)、会場：新宿文化センター第3会議室、講師：渡辺一巳

6. シンポジウム「地域住民のための快適な公立ホールをめざして」報告  
開催日：2011年10月27日(木)、会場：さいたま市民会館うらわ、  
共催：埼玉県舞台技術協議会、内容：第1部 対談『舞台進行の役目』 福田義明(松戸市民劇場/舞台進行) VS 八板賢二郎、第2部 シンポジウム『新時代の公共ホールの運営を考える』  
パネラーは、舞台美術家の滝善光、行田市教育文化センター責任者の伊藤勝仁、舞台監督の早船司、照明家の今野幸彦、亀有リリオホール(副支配人)の飯島正明。
7. 裏方の教養講座「日本の音楽と西洋の音楽」  
開催日：2012年1月30日(月)、会場：新宿文化センター・第1会議室、講師：三好直樹(明治座舞台管理営業部長)、八板賢二郎(ザ・ゴールドエンジン代表)、協賛：埼玉県舞台技術協議会、一般社団法人日本音響家協会、機材協力：株式会社エヌエスイー
8. 第1種/第3種劇場技術者検定講座の佐賀開催  
開催日：2012年2月15日～16日、会場：佐賀県・武雄市民文化会館小ホール  
共催：宮崎県音響照明舞台事業協同組合、武雄市文化会館  
後援：九州公立文化施設協議会、一般社団法人日本音響家協会
9. 第1種/第3種劇場技術者検定講座の富山開催  
開催日：2011年3月3日(土)～3月4日(日)、会場：富山県・新川文化ホール(ミラージュホール)、共催：富山県公立文化施設協議会
10. 連盟の報酬規定  
連盟が外部から劇場業務委託する場合の舞台進行、舞台照明、舞台音響の報酬を定めた。
11. 会報発行  
12号～15号 4回発行
12. 会議開催  
第5回総会 2011年5月16日(月)新宿文化センター・和会議室で開催  
第9回理事会 2011年10月17日(月)新宿文化センター・第三会議室で開催

## 第2議案 2011年度決算報告

五十嵐裕理事の報告の後、戸張浩二監事の監査報告があり、これを全会一致で承認。

## 第3議案 2012年度事業計画案

八板賢二郎担当理事から提案があり、各事業の担当者を決定し、全会一致で承認。なお、急遽提案された「劇場の営利利用に関する調査」は協議の結果、内容を再検討してから実施。

1. 一種検定講座開催 開催地調整中、担当：八板賢二郎理事  
※その後、2012年8月18日(土)～19日(日)、会場：パッハホールに決定
2. 三種検定講座 東北開催(東北劇場技術者支援事業)、担当：小松正俊理事  
※その後、2012年8月18日(土)～19日(日)、会場：パッハホールに決定
3. 製作現場見学 大道具製作場、担当：滝善光理事担当
4. 裏方教養講座 最新の舞台照明技術、担当：市ヶ谷昌典理事
5. 劇場技術者寺子屋 舞台監督の仕事を学ぶ(クラシックのステージマネージャ)  
担当：山形裕久理事
6. 第二種検定講座試行開催、担当：八板賢二郎理事

## 7. 劇場の営利利用に関する調査、担当：平野克明理事

### 第4議案 2012年度予算案

五十嵐裕理事から案が提示され、全会一致で承認。

#### ■劇場技術者寺子屋「舞台監督の仕事学ぶ 演劇編」の報告 群馬県 平野 克明



2012年4月16日(月)に、東京都の新宿文化センターにて、当連盟主催の技術者向け講座「舞台監督の仕事学ぶ 演劇編」が開催された。今回の講演は、舞台関係の仕事に従事する人やそれに興味のある方には非常に魅力的な内容だった。というのは、演劇のみならずイベント進行なども手がけ、マルチな活躍をされて

いる大木玉樹氏と著名なプロデュース公演に多く携わる藤崎遊氏の実力あるお二人の舞台監督から、実体験に基づいた貴重なお話が聞けたからである。

第一部の大木氏のお話で興味深かったことは、サッカーの試合などでも、舞台監督的なスタッフが必要だということであった。単にスポーツ競技だけを行うなら、審判がいれば試合は成り立つが、開始前のセレモニーや放送があればそれに付随する舞台監督的な仕事がある。また、スポンサーすなわちお金を出す人がいる場合、それに付随していろいろなイベントが行われ、スポンサーへの配慮によりさまざまな作業が生まれるそうだ。たとえば、スポンサー以外の広告は全てマスキングされることなどである。

また、実際に、2002年日韓合同のワールドカップの組織図と2011年に日本で開催されたクラブワールドカップ、サントス対バルセロナの映像を基に、サッカーイベントにおける運営スタッフの組織体系と動きを説明していただき、サッカーイベントでの「舞台監督業務」の理解が深まった。

第二部は、藤崎氏からフリーの舞台監督の仕事についてつぶさに説明していただいた。

たとえば、藤崎氏が舞台監督になった経緯や実際にひとつの演劇作品が上演されるまでの過程を、実体験を基に非常に精確に説明され、且つ、氏ならではの切り口で舞台監督の仕事や作品製作の進め方に関しての問題点を指摘され、また、それらはどうあるべきかのお話を聞いた。

実際に、パルコ劇場で上演された中谷美紀主演の「猟銃」のタイムテーブルを基にお話をされた舞台監督の仕事のくぐり方は非常に参考になった。そのタイムテーブルから様々な苦労が見て取れる。たとえば、パルコ劇場は、デパートの中にあるという特殊性から夜からでないとは基本的には、搬入ができないこと。また、昼過ぎの搬入の注意事項には、「静かに」との注意書きがあることなどだ。また、舞台・照明・音響・衣裳・ヘアメイク・出演者等の動きを管理統括するほか、搬入車両やアルバイトなどのスケジュールまでも把握しておかねばならない。そして、忘れてはならないのは、「休憩」である。一定時間内に休憩を入れておかないと違法になり、全体を統括する舞台監督はその責めを負うことになるからだ。

そして、最後の質疑応答では、地震時には、どのような状態で、どの時点で公演を中止するかなどの悩ましい問題についてお話があった。ここでは紙数に限りがあるので言及できないが、参加された方には是非聴いていただきたい重要なところである。

今回の講演で、舞台監督の仕事の「奥」を知ることができ、今後の劇場での仕事にも役立つと感じた。

## ● 交流会

講座の後に、今回も恒例の交流会が、「BARU & DINING GOHAN」で開催された。Facebook 上の「日本劇場技術者連盟ラウンジ」のトップページにある写真がまさにそれで、洋風でとても洒落た居酒屋で料理もおいしく、しかも、講師の大木氏と藤崎氏も参加され、マンツーマンでパーソナルなお話が聞けるという濃密で贅沢な時間が過ごせた。

もちろん、会員間の交流も活発で、直接会話を交わすことでしか得ることができない「生」の情報のやりとりが盛んに行われていた。

みなさんも名刺を片手に、参加してみてもはどうだろうか。

---

## ■製作現場を見に行こう「大道具編」～舞台の裏方の仕事を裏から見て学ぶ～ 金井大道具株式会社シーンテック埼玉美術センター見学と交流会の報告

群馬県 平野 克明

2012年6月11日に、劇場技術者なら知らない者はない金井大道具株式会社のシーンテックさいたま美術センターを見学した。埼玉県さいたま市にある本工場は、歌舞伎・テレビ・イベント・コンサートなど様々な分野で使われる大道具を製作している日本最大級の大道具製作工場である。

場内はイベント用と芝居用の大道具製作エリアが殆どを占めており、材料の木材、ベニヤ板、工作機械などが周辺に配置され、様々な大道具が忙しく組み立てられていた。大きな幕類の製作もあるため、天井までは30尺以上の高さとのこと。その他に、カッティングマシンの置いてある工作室、経師が作業するエリア、幕類を製作保管するエリアなどがあり、約30人がその製作現場で作業をしているようだ。

まず、イベント用の大道具製作の現場を見学した。その作業工程は、クライアントから製作するもののデザイン画を基に「書き抜き」と呼ばれる設計図を起こす。それから「合番(あいばん)」と呼ばれる施工図にあたるものを起こし、それを基に製作に入っていく。見学した際には、有名化粧品会社から発注されたもので、鉄骨ワゴンの骨組みの上、(特)センチ5ミリ(=5分)ほどの厚ベニヤを張り、組み合わせる作業を行っていた。最近では、大道具が大型化してきているため、鉄骨を使用することが多くなってきているようだ。これらの大道具は、使用後はすべて廃棄される。木製のものは産業廃棄物となるが、鉄はキログラム当たり13円ほどで売却されリサイクルされるようだ。

その後、最新鋭のカッティングマシンを見学。実際に動いているところが見られなかったのが残念だが、コンピュータ制御で、木製・紙製のボードを設計図通りに綺麗に且つ緻密に切削する機械とその機械によって製作途中の作品を見ることができた。今までなら、職人的なスタッフによる手作業で、多くの時間を費やして仕上げた作品も、短時間で完成するようで、かなりの経費節減につながると思えた。

その他の作業現場もじっくりと見ることができ、大道具の製作過程を体得することができ、有意義であった。

ところで、この大道具の製作現場でも忘れてはならない一番大事なことは、「安全」であった。

今回の見学会は、同社安全衛生管理室の小倉直一氏と長谷部俊一氏のお二人に工場内を案内していただいた。お二人は現場の安全管理のために日常点検を行い、危険につながるがあれば、それをチェックし課長に報告、現場にフィードバックして、危険回避につなげている。そのお二人の話にあったことは、私たち劇場の現場でも通用することなので、以下にその要旨を述べたい。

事故や怪我があれば、その当事者が不幸になるばかりでなく、多くの人がある対応や後処理に巻き込まれる。ことによっては、労基署からの指導改善などにも時間と費用を割くことになる。それは、会社の経営にまで影響することなので、事故と怪我はなんとしてでも避けたいことである。そのために、様々な安全対策のためのマニュアル作成や啓発のための張り紙をしているが、より大切なのは、現場での危険回避のための「声かけ」であるとのことだった。



### ● 交流会

恒例の交流会が、見学後に大宮駅そばの居酒屋「力」で開かれた。見学者の多くが参加し、副理事長のお一人で、現在京都造形芸術大学で教鞭をとられている小坂部氏のご発声で乾杯となった。このように日本のトップクラスの技術者と差し向かいで、ざっくばらんに会話できるのは、連盟の素晴らしいところである。私も、多くの劇場を知る理事長から有益なアドバイスを受けることができ実に有意義で、その上和やかで、楽しいひとときを過ごすことができた。

### ■ 参加者の感想

#### ○金井大道具工場見学を終えて 群馬県 伊勢崎市境総合文化センター 内山 信行

6月11日私の誕生日に工場を見学させて頂けるとは、なんというご縁だろうと勝手に思い、大宮から埼玉新都市交通というモノレールに揺られること10分で目的の駅に着きました。

駅からしばし歩いたところに工場はありました。安全衛生管理室、副部長の長谷部様からヘルメットの着用の仕方などの安全衛生のお話を伺ってから、いよいよ工場の見学です。

電飾を作る部署、塗装する部署などと業務内容で分けて仕事をしていましたが、どの部署も手際よく仕事を進めており、まさに職人技だなと感心させられました。また、木材を切断や加工する機械も見ることがないようなもので、良いものを素早くきれいに作るには専用の道具が必要であると思いました。

工場内の説明においては、折に触れ安全や事故防止のお話が出て、労働災害をなくそうという並々ならぬ会社の取り組みを感じました。そういった意識を高めるために業務に必要な資格取得も推進、社内でのマニュアルの整備、一人一人が責任者であるという会社の風土は見習うべきと思いました。

※日本劇場技術者連盟のホームページ (<http://www.teec-or.com/>) から、上記報告の別バージョンがご覧になれます。

### 連盟会員の新鮮便

#### ■「オペラ業界に入って痛感した、舞台技術知識の必要性」 埼玉県 米本 麻紀子

私は新劇系の桐朋短大演劇科で、演技と裏方の基礎を教えられ、卒業後、劇場クラウン（道化師）の方に弟子入りし、4年ほど師匠の公演のバックステージクルーやイベントなどでパフォー

マンス活動をしておりましたが、結婚後、偶然オペラを勉強する機会を得て、オペラの演出助手から、舞台監督もするようになりました。

毎年音楽大学から卒業する歌手、演奏者の数に比べ、オペラの公演数は少なく、歌手にはオペラそのものを勉強しても、歌う場がほとんど無い状況があります。そのため経験を得ようと、歌手が自らオペラ団体を立ち上げるケースが多く、また公演資金を補填するために、市民合唱などの一般参加者への門戸が開かれているため、オペラ業界には、私のように本来門外漢であっても、参入できる状況があります。

しかし（最近では改善されてきましたが）、音楽大学やオペラ歌手養成所では、ある時代までは公演開催に関する知識や裏方に関する知識、体験が全く教えられておらず、歌い手さんが自分で公演を打とうと考えたときに、予算配分的にはどうしても演奏者寄りに傾いてしまうため、しばしば舞台上の安全管理がおろそかになりやすい傾向があるように感じられます。

大手の公演開催者の舞台に複数回参加したことがある歌手さんならば、プロの舞台監督に頼まないと「危ない」という考え方が少しはあります。しかし、オペラ好きの一般の方や小規模なコンサートを開き慣れた演奏家の方は、オペラ公演の制作を続けるなかで、最初のうちは用心してプロに発注をかけていても、無事に数回の公演を終えて状況が分かり慣れてくると、自分でもあれくらいはできると考え始めます。すると、予算を削りたくなるのは、たいてい舞台監督やステージ・マネージャの部分であるという状況をよく目にしました。

相手がどのような団体であっても、ホール側の方は安全に進行させなければならないわけですので、なかなか難しいのかもしれませんが、できればやはり舞台技術者団体側から、舞台の危険などに関する一般向けの啓発、アピールをたくさん行って頂けると良いのではないのでしょうか。

先日某所で、とても大きな舞台技術セミナーがあり、あつという間に参加者が定員いっぱいになっていた状況を見ると、舞台技術教育に対する一般からのニーズは実は高いのではないかという気がします。また、そういったセミナーやイベントなどももちろんですが、例えばちょっととっぴですが、舞台監督やホールさんや技術系の方を主役にした漫画を人気誌に連載して貰うとか、映画やドラマ、ミュージカルなどで舞台裏方をテーマにしたものを作ってもらうなど、そういった普通の方にもコンセンサスを得やすい素地を作れば(変なイメージが付く危険性もあるかもしれませんが)、舞台技術者の皆さんがより危険が少なく、より質の高い活動がしやすい状況が醸成されるかもしれないな、などと考えることがありました。劇場技術者連盟で、演技者、歌い手なども含めた安全を考えるシンポジウムも、開催してはいかがでしょうか？

## ■感動するところ

北海道深川市 坪田 栄藏

人は素敵な演奏や舞台に接すると感動します。それはどんなところで感動するのでしょうか。私はクラシックのコンサートに行くことが多いのですが、よく周囲から「曲の解釈が素晴らしい」とか「テクニックが優れている」とか聞きます。しかし私はその感想に違和感を覚えます。

ある意味クラシック音楽は難解で、構成美とか正確な演奏技術の上での表現力が問われるのかもしれませんが、でも私はそのような理論的なものより自分の感性でコンサートを楽しんでいます。

かなり前ですが、私が所属するアマチュアオーケストラに北海道内のある有名なピアニストから共演の申し出がありました。少し不思議に思いながらも私たちの定期演奏会にソリストとして出演いただいたのですが、耳を疑うような演奏でした。その後その方は在京プロオーケストラの

北海道ツアーに出演したので聞きに行ったのですが、私たちとの共演の時と同じように耳を疑う演奏なのです。ちょうどこのオーケストラに知り合いがいて、恐る恐るその演奏について聞いてみると「あなたが感じたとおりですよ」とのこと。しかしながらその後の新聞のコンサート評では「絶賛」されていました。後で分かったのですが、このピアニストの方は当時悩みを抱えていて、私たちのアマオケをプロとの共演前の腕試しに考えたようです。新聞批評も様々な制約を受けていたようです。

話しはずれてしまったかもしれませんが、私の感動は自分の肌が「ゾクッ」と来たか否かに掛かっています。それはプロもアマチュアも区別はありません。どこかで聞いたのですが、ある有名なジャズマンは「音楽の良し悪しは首筋に聞け」と言ったそうです。周りの批評はどうであれ、自分の首筋がゾクッとしたものは、その人のその時に最高のものだと思います。これからもそのような公演を楽しみに、そしてそのような舞台に関わって行きたいと思います。

## ■平成 24 年度全国公立文化施設協会研究大会に参加して 兵庫県神戸市 山形 裕久

今年度の「全国公立文化施設協会研究大会」は鳥取県民文化会館で開催され、この研究大会の第一分科会(業務管理&技術委員会の合同企画で、テーマは、「公立文化施設における危機管理の再考-震災の教訓から学ぶ-」)に、パネリストとして出席しました。



パネラーは、東日本大震災で被災した、岩手県大船渡市民文化会館、(財)石巻市文化スポーツ振興公社、(財)南相馬市文化振興事業団からの3名と中越地震及び中越沖地震を経験した、(財)かしわざき振興財団から1名。そして、当時神戸市の区民ホールで阪神淡路大震災を被災した私(現在、貝塚市民文化会館：通称コスモシアター勤務)でした。

そこでは、東日本大震災の生々しく痛々しい現状はじめ、地震による2次災害の大津波の体験と当時の状況や、また復興に向けての今後の現状説明などについて、大船渡、石巻の方々からそれぞれの立場で報告がありました。

南相馬からは大津波による被害と福島第1原発の放射能汚染事故についての報告があり、放射能汚染という目に見えない恐怖を改めて、再認識する事が出来ました。

また中越地区からは、復興のシンボルとして新しく来月7月8日(日)にオープンする、柏崎市文化会館アルフォーレの、建設経緯を中心に報告がありました。

私も、当時の復興記録ファイルを灘区民ホールから借用して、他館の方と同じように映像を使用しながら被災から復興の状況、課題などを説明しました。

この研究大会の冊子の編集完了後、機を得て詳細をご報告したいと思います。

なお、今回の研究テーマは、時間がいくらあっても話が尽きないほど白熱したパネルディスカッションとなりました。そこで、私がパネラーからの質問で回答した重要な発言についてお伝えしたいと思います。

一つは、「地震発生時に誰が催しの中止を指示するのか？」という一般的には、非常に悩ましい問題です。これに対し、「待機や中止」を実際に指示した経験から、「舞台進行中の震災直撃の場合は、現場にいる舞台監督が判断すべき」と答えました。

「舞台監督」は、舞台及びそこで行われている演出に関わることすべてについて責任と権限があるはずですが、また、「舞台監督不在の場合、公共施設の舞台操作機構責任者が判断すべき」とも考えます。実際の災害時には、館長や上司が必ずいるとは限りませんし、連絡が取れる保証もありません。ですから、普段から管理運営や技術スタッフ、利用者などと、危機管理についての対応が協議・合意できているか改めて見直してください。

二つ目は、前号の「幕内瓦版」の掲載文でも述べましたが、まず何が何でも「自身の命と身体を守る事が最優先である」と自分は考えます。というのは、自身の命があって、健全な肉体があって、はじめて観客・演者・関係者などに対して、「待機・避難・誘導」の重要な指示を、会館職員やスタッフに伝えることができるからです。自身が傷つけば、治療もしくは救助・救出を待つ身になります。命を失えばなおさらです。そのためにもまず、自身の身体を如何に安全に確保できるかが最も重要なことなのです。

---

## イベントのお知らせ

### ■ 第1種劇場技術者、第3種劇場技術者検定講座の開催

第1種劇場技術者と第3種劇場技術者検定講座を下記の通り開催します。多くの方のご参加をお待ちしています。

日時：平成24年8月18日(土) 10:00~18:00、19日(日)10:00~17:30

※18日には18:00からワンコイン交流会もあり

会場：中新田バツハホール（宮城県加美郡加美町一本杉101）

主催：日本劇場技術者連盟、中新田バツハホール

後援：一般社団法人日本音響家協会

対象：◎1種/比較的シンプルで危険性の少ない舞台機構で、市民の舞台芸術の創造を支える事業を主とした劇場等に従事する技術者

◎2種/劇場技術に興味を持ち、劇場運営を支援する市民

受講料：◎1種 12,000円（教科書代2,000円込み）

◎3種 4,000円（教科書代2,000円込み、加美町民は教科書代のみ）

申し込み・問い合わせ先：中新田バツハホール 担当：小松 Fax:0229-63-7364

E-mail: [masatoshi.k@town.kami.miyagi.jp](mailto:masatoshi.k@town.kami.miyagi.jp)

※詳細は連盟ホームページからもご覧になれます。URL: <http://www.teec-or.com/>

---

## 連盟からのお知らせ

### ■ 「日本劇場技術者連盟ラウンジ」がFacebookに登場

Facebookに日本劇場技術者連盟のページが、「日本劇場技術者連盟ラウンジ」として作成されました。気軽に書き込みをして、交流を深めましょう。

まずは、連盟ウェブサイトのトップページ (<http://www.teec-or.com/>) から「日本劇場技術者連盟ラウンジ (Facebookで交流)」をクリックしてください。

---

発行：日本劇場技術者連盟 発行人：齋藤 譲一 編集人：平野 克明 発行日：2012年6月30日

編集委員：阿部喜一・小松正俊・桑原基弘・庄司 至・増田哲也・山下祐治

# 幕内瓦版 第拾七号

電子版 発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

## ■第1種・第3種劇場技術者検定（宮城）報告

宮城県 小松 正俊

今回、照明の講師を岩手県にある北上市文化交流センターの千田敬氏（連盟会員）にお願いし、8月18日と19日、宮城県の中新田バツハホールを会場に第1種及び第3種の劇場技術者検定講座（※注）を実施しました。

中新田バツハホールでの開催は、前回2010年に続き2回目となり、今回は普段劇場を利用することの多い地域住民と劇場技術者とのコミュニケーションを図りながら、裏方の仕事を広く知っていただくために土・日の開催となりました。土・日開催の為に第1種の受講者がどのくらい集まるかが不安でしたが、第1種を11名、第3種を13名が受講されました。講座の最後に実施した筆記試験の結果、全員が合格されました。



1日目のカリキュラム終了後に行われたワンコインパーティーでは予定の時間では足りず、前回同様に参加者のほとんどの方が二次会へと流れ、それぞれが熱心に交流を深めていました。劇場技術者検定はその内容が充実していることの他に、このワンコインパーティーへの参加が非常に大きなポイントになって

いるようです。普段、交流する機会のない方々がざっくばらんに打ち解けあって情報交換が出来る場を提供しているのも、この検定の魅力となっていると思います。

各種団体が行う研修会や講座等は、首都圏を中心に行われており、東北ではこのような技術的な研修会や講座等は殆んど行われていないのが現状です。財政的なことも含めて、簡単には首都圏まで足を運べないが、積極的に受講したいと考えている劇場技術者は沢山いるはずですが、また、第3種対象の方々に関しては第1種対象の方々以上に、このように地方で開催する研修会や講座は貴重であり大変有意義なことだと思えます。

今回の宮城開催を機会に、今後東北の各地でこのような研修会や講座等を開催し、東北の劇場技術者の育成に貢献すると共に、地域における文化・芸術の発展には、陰で舞台を支える劇場技術者の存在と必要性を、地域住民を含め劇場を利用する全ての方々に認識していただけることを期待します。

※注 第1種は、比較的シンプルで危険性の少ない舞台機構で、市民の舞台芸術の創造を支える事業を主とした劇場等に従事する技術者を対象。第3種は、劇場技術者を目指す方、劇場業務に興味のある方を対象とする。詳細は、連盟ホームページの「技能検定ポリシー」を参照のこと。

## ●参加者の感想

### ◎「第三種劇場技術者検定を受けて」

2日間にわたる講習・試験が終わって、まず思ったのは「参加して良かったな」ということでした。

私は高校時代に演劇部に所属していたこともあり、舞台を観に行ったり、自分も舞台に立つことが好きです。せっかく舞台に関わるのなら裏方の仕事も理解したいと思い、検定を受けることにしました。

基礎講義から始まり、照明・舞台進行・音響と一つ一つ丁寧に説明して頂き、初めて聞く言葉や普段何気なく使っていた言葉の意味をより深く理解する事が出来ました。実際に自分の手で触れることも出来たのでとても分かりやすく楽しんで学びました。また全体を通して、危険が多い現場だからこそ出演者・他スタッフへは勿論、自分自身へも「安全」に対する配慮が大切だと痛感しました。

そして何より、自分とは違った立場・違った角度から「舞台」というものに関わっている方々と接することができたことが一番だと思いました。それぞれの立場・役割の多くの方々が、それぞれの考えを持ちながらも、一つになって「舞台」というものが出来ているのだと改めて感じました。

資格を取れたからこそ、これを機に更に理解を深め、知識だけではなく経験を重ねることが出来れば良いなと思います。  
(宮城県／鈴木 まみ)

◎今回、初めて連盟会員として検定のアシスタントをさせていただきました。2年前、同じ会場で検定を受講する側でしたので、その頃のことを思い出しながら懐かしくも新鮮な2日間でした。

先生方の講義は私自身にもとても勉強になり、受講生と一緒に有り難く聴講させていただきました。

各地域から集まってくださった受講生の皆さんの中には意外な職種の方もいて、交流会ではいろいろなお話や、舞台への思いを聞かせていただき、そのやる気とアイデアをヒントに何かもっと面白いことが出来るのではないかと、わくわくさせられる気持ちになりました。

アシスタントさせていただくことに初めは不安と焦りがありましたが、皆さんの学ぶ姿勢と感想を拝見させていただいて、検定を開催できたことに嬉しさと達成感でいっぱいです。

なにより人と人とのつながりの大切さを実感し、皆さんと出会えたことに感謝と、舞台の今後の希望を感じて、自分自身が元気とやる気をいただきました。

また、八板さんより東北の講師のみによる検定開催の提案をいただきました。私の中ではなんだか寂しい気持ちの半面、実現できれば、より地元の劇場に対する意識向上の為にもなるだろうと思いました。

今回、講師にお迎えした千田さんの講義にも丁寧さと、千田さん自身が楽しそうにされている様子に、開催実現の可能性を感じました。実現することで、復興に向けて頑張っている東北を元気にする為の役に立つことにも繋がるのではないのでしょうか。

舞台関係のお仕事をしている方はもちろん、私のように舞台には無関心だった方やより多くの

方々に、この検定の存在と舞台への興味と関心を持ってもらう為に出来ることは何かという事を改めて考えさせられた2日間でした。(宮城県/畠中 ひとみ)

## ■特番「音のゼミナール」報告

群馬県 平野 克明

「音のゼミナール」と題した技術者向け講座が、2012年9月10日に東京都の豊島区民センターで開催された。1部は今年、日本音響家協会賞を受賞された永田音響設計の豊田泰久氏の講演録画の再上映。2部は、本連盟主催の西洋音楽の講座でも講師をされた三好直樹氏(明治座舞台株式会社 管理営業部部長)による講演「シンフォニーホールの管理運営とクラシック音楽のレコーディング」であった。

1部に関しては、日本音響家協会の報告に譲りたい。

2部の講師三好氏は、音響技術者として、東京芸術劇場などをはじめ、さまざまな現場で長く活躍されており、その実践に裏打ちされたお話は、実に有益だったので、そのいくつかについてご紹介したい

まず、音楽専用ホールであるシンフォニーホールと多目的ホールの違いについての説明があった。前者は、舞台と客席が一体となり、また、その空間は外界と完全に遮断されていて、音楽を演奏するには最適な環境にある。一方、後者は、その反対で舞台・客席は外界(舞台裏など)と遮断されておらず、また、プロセニウムアーチで、舞台と客席の間に音響的な「関所」がある。また、反響板があっても、そこには隙間があることもあり、幕類も多く設置されているため、音楽演奏においては、シンフォニーホールに比べると、好ましくない環境にある。



そのような、シンフォニーホールには「よい音、静けさ、よい響き」が求められる。それは、言い換えれば次のようなことになる。よい音とは、フラッター等の音響を阻害する余分な音を発生させないこと。静けさとは、外部・内部からの騒音侵入を阻止することにより、静粛性を確保すること。そして、よい響きとは、音楽に美しい響きを加味することである。

そして、これらを踏まえて、劇場技術者は、空調・照明・音響設備の経年劣化による異音などを常にチェックし、確認されれば、それに即座に対応する必要がある。三好氏も実際に、ホール内でチリチリという異音に悩まされ、永田音響設計による調査で、受電トランスの防振ゴムの劣化によるものと判明し、対応したことがあるということだった。このような些細なことでも、シンフォニーホールには大きな影響があるということが、よく理解できた。

また、是非実践したいと思ったことは、演奏中はスピーカ出力を切り離し、音響事故が起きないようにするという事である。通常のホールであれば、いくつかのスイッチの入り切りが必要になる作業で、実践は困難だが、東京芸術劇場は改修により、マスタースイッチが付いたため、容易にこの作業ができるようになったそうだ。

また、改修しても替えてはならないものもあるというのは、非常に参考になった。それは、演奏モニターなどのアナログ機器である。この理由は、デジタル伝送化により、画像・音声モニターなどに遅れが生じるので、注意すべきとのこと。何でもデジタルがアナログより優れていると

いう考えは危険であることが判った。

ところで、音が響くシンフォニーホールならではの悩みもある。それは、MC などの音声は、響きすぎることにより明瞭に SR できないことである。このようなことに対し、東京芸術劇場などでは、改修前はスタンド付のスピーカ（EV 社製 SX300）を使用するなどして、音の回りをコントロールしていたが、部分改修し、BOSE のラインアレイを採用することで良好な SR 音を得ることができた。その後、大改修により新設されたラインアレイはまだ十分な効果を発揮していないと感じられているようだ。

次に、ステージマネージャーの仕事について。コンサートの進行一切を取り仕切り、オーケストラの楽器搬入、山台組み、譜面台・椅子の配置などの会場設営から、演奏中の舞台進行、転換を全て行う。この中で、驚きを感じたのは、椅子の配置から、どの楽団のステージマネージャーが作業したのかが、判るということだ。それほど、オーケストラの演奏において椅子の配置は重要であり、また、ステージマネージャーはそれを知悉して、作業をしなければいけないほど緻密さが求められるのである。

このほか、ホールスタッフの禁止事項、クラシック音楽の録音の実際など実に有益な内容だった。特に、録音方式の違い（①MS 方式②AB 方式③マルチマイクによる録音）による実際の音の聞き比べは、興味深く、もっと時間を取り解説していただきたいと思った。

最後に、三好氏の言葉で最も胸に刺さったのは、劇場技術者も「音の内容」、言い換えれば、劇場で演じられるものの本質を理解した上で、劇場技術者の仕事をすべきであるということであった。襟を正して、再度勉強しなおしたい。

なお、今回の講座の 2 部の模様は、USTREAM でネット配信された。今後もネット配信を計画しているので、日本劇場技術者連盟のホームページで確認されたい。もちろん、無料。

## ●交流会

予定外であったが、会員のお奨めのうなぎ屋「うな達」で開催された。地上には小さな看板があるのみで、まさに穴場といえるお店で、おいしいうなぎ料理に舌鼓を打ちながら、にぎやかに音響家協会と連盟会員の懇親を深めることができた。

その中で、今回も非常に興味深いお話を音響家協会の方から聞くことができた。それは、3 点吊マイクというのは日本独特のもので、諸外国では 2 点吊マイクしかないとのこと。つまり、舞台中央を狙えればよいという考え方なので、中央前後にマイクが移動すればよいので、2 点吊りとなるようだ。日本人はそのような点でも繊細さとこだわりがあるのかと感じた。

---

## 連盟会員の新鮮便

### ■日々の業務

### 島根県 スサノオホール 桑原 基紘

私どもの職場に NPO 職員は舞台技術者が現在 2 名いますが、我々は日々舞台に関する業務をこなすだけではなく、舞台に関わらない日は一般事務作業や自主文化事業の企画も行っています。

当地は人口が少なくイベント自体が頻繁にあるわけではないことが理由の一つに挙げられますが、我々がイベントを自ら企画して実施することで、ホール自体をより多く稼働させて、舞台技術者の現場を作り、お客さんと呼んで町を活性化させるといった流れをこの小さな町に作りた

いとの思いがあるためでもあります。

制作側に携わることによって、お客さんや主催者側の目線、そして舞台技術者側の目線という視点を変えて舞台づくりができることは、私にとって大きな経験となっております。やることが多くとても大変ですが、これからも当地で面白い企画をこれからも考えつつ、より良い舞台づくりに従事していきたいと思えます。

## ■ 新しいワークショップの企画から実施まで

群馬県 伊勢崎市境総合文化センター 内山 信行

7年前の市町村合併により、私はこの会館に勤務することになりました。そして、私が来る前から自主事業として、演劇フェスティバルが開催されておりました。アマチュア劇団の公演と役者を目指す方を育てるワークショップの2本立ての事業でした。ワークショップからも何名かはアマチュア劇団に所属する人もあり、一定の効果もあったと思えますが、3年ほど携わって何か足りないと思いはじめました。そして、私が辿り着いた答えは、この地域には制作が出来る人、演出が出来る人、戯曲が書ける人、メイクが出来る人等々が少ないということでした。特に制作に関しては意識が低いと思えました。

と、思ったまではよいのですが、どうすればいいのかわからず、辿り着いたのがワークショップの形を変えてみるということでした。そして、考えはじめてから4年後の今年ようやくそのワークショップを開催することが出来ました。

講師にG2氏を迎え、2日間のワークショップで1日目は「制作は雑用係ではない」2日目は「右脳が演技をおもしろくする」というテーマでそれぞれ受講生を募集いたしました。結果としては2日間とも定員オーバーで、受講生の反応もとてもよかったです。

今後は戯曲、演出、メイク衣装、演劇音響、演劇照明、大道具と演劇に特化した形でのワークショップを企画していこうと思えます。会館のスタッフとしてのサポートはもちろんいたしますが、自分達では出来ないサポートもあります。ならば、こういった形でのサポートもあるかと思えます。今回実施してみて、周りの反応もよかったですので報告させていただきました。

## ■ 「男の仕事場」とは言わないが

茨城県 阿部 喜一

保育園の先生から「男性の保育士さんは長く続かない」という話を聞きました。最初は頑張っているとしても、結婚などが迫ってくると生活の不安から転職してしまうそうです。

私の周りでも似たようなことが・・・舞台関係の若い人たちは、現場をまかせられる頃になると先が見えてしまうのでしょうか、他の業界へ転職する人が少なくありません。

将来の姿が見えず、経済的な不安があっては致し方ありません。先を行く者としては、目標にもらえる存在にならなくてはと思いつつも、そんな偉い人であるはずもなく・・・。

劇場法では、第13条で「国及び地方公共団体は、制作者、技術者、経営者、実演家その他の、劇場の事業を行うために必要な専門能力を有する者を養成し、確保する・・・研修の実施その他の必要な施策を講ずるものとする（中略）」とあります。

まさか「都市部の大劇場の技術職員を養成する」という意味ではないと思えますが、地方においては零細業者を育成しなければ、劇場技術者はこのまま高齢化して専門家がいない状態になっ

てしまいます。また「文化芸術振興基本法」も第16条で同じようなことが謳われています。まあ、劇場法や基本法を引き合いに出しても、誰に訴えていいものやら・・・ですが。

手厚い保護をしてほしい訳ではなくて、少なくとも公立文化施設においては「そもそも、何を委託するのか」を検討したり、労働条件が適切かどうか見直す必要があります。また、金額優先の入札制度や単年度の契約が「舞台技術管理」になじむ方法なのかも考えてほしいものです。だからと言って、安易に「指定管理者」にされても事態は後退するだけです。

他の地域の情報収集もせずに私の近辺の問題を書いてしまいましたが、こんな状況はここだけなのでしょうか。「こっちは同じだよ」という人がいたら、Facebookの「日本劇場技術者連盟 ラウンジ」（※連盟からのお知らせ参照）で情報交換できるといいですね。

そういえば、乗り込みの業者さんも女子が増えていますね。歓迎すべきことですが、保育園と同じ事情では困ります。

## ■つべつ日本フィルセミナーに参加して

北海道深川市 坪田 栄藏

北海道東部の内陸に林業中心の人口5千人程の津別という町があります。失礼ながらクラシック音楽にはあまり縁がないように思える町ですが、実は今年17回を迎える「つべつ日本フィルセミナー」が開催されています。これはアマチュアオーケストラ等で活動している愛好者の方々を対象に、日本フィル（以下日フィル）のメンバーが講師となり3日間の合宿を行い、最終日にプロ・アマが一緒にステージに登ってコンサートを開催するというものです。このセミナーでは、奏者だけでなくステージマネージャーコースもあるということで、今回初めて参加させていただきました。以前ホールの管理もやっていたし、普段からコンサートのサポートや地元のアマチュアオーケストラのマネージャーもやっている身ですが、プロのステージマネージャーと一緒にサポートする機会はないので、いい勉強ができると思い参加したものです。

さて私の参加するコースのセミナーの内容としては、お互いの立場がすぐ分かったものですが、改めて講義というものはなく、一緒に工夫しながらこの寄せ集めのオーケストラの演奏をスムーズに進めていこうということになりました。その中でも、講師となる日フィルステマネの方の細やかな対応は勉強になりました。

このセミナーには全国から参加者が集まります。それは単にプロからの指導を受けられるということだけではないと思います。そして17回も継続している事業運営の仕組みを見るのも、今回参加の目的でありました。

きっかけは日フィルのあるメンバーが定年退職後に津別に移住し、この町の暖かさと熱心な街づくりの意気込みを感じ、この企画を持ちかけたそうです。運営事務局は役場に置いているのですが、運営の主体はあくまで住民です。心のこもったサポートは練習やコンサートの時だけでなく、1日のメニューが終わった後の交流の場にも出席して一緒になって交流しています。そうそう、初日の夜には交流会があり、最終日のコンサート後には打ち上げ会がちゃんと設けられています。もちろん役場からは補助金も出されていますが、その額は思ったほど多額なものではなく、その分、役場や会場となる公民館の職員が一緒になってサポートしてくれる姿は、町が一丸となってこのセミナーを大切に思い、盛り立ててくれているのが分かります。そして、それらスタッフも様々な参加者から何か得るものがあるのでしょう。

そう、このセミナーは音楽を学ぶだけでなく、交流し、暖かいこの町の気持ちを広げることに

あるのかもしれませんが。そして、それぞれが自分の所属団体に戻って仲間にも同じ気持ちで対することで、暖かい輪が出来ていくのでしょうか。そしてまた、このセミナーに戻って来たいくなるのでしょうか。私もまた参加したいセミナーです。

さて最後に、会場となった施設は小規模ながら、ある程度の吊り物や音響・照明設備がある施設ですが、専門技術者はいなく、職員が見よう見まねで操作しています。それは覚え誤りもありますし、適正な点検も行われていない危険な状況もあります。今回いくつか指導させていただきましたが、このような施設は多くあることでしょう。それらのホールが適正に運用できるよう、幾ばくか力になればと思います。

## ■50 過ぎてお上りさんが行く！

東京都 出井 稔師

上京をして3ヶ月が経ちました、宮崎の片田舎から出て来て右も左も分からない状態でした。以前に住んでいたわけでもなく土地勘もなく怒涛の毎日でした。現在は明治座舞台株式会社にお世話になっております。そして、明治座舞台は7月より東京芸術劇場の業務委託を受け、私は音響業務の担当で当劇場に勤務しております。この劇場は9月よりリニューアルをオープンしており、皆様のイメージもたいへん変わったものと思います。音響機器もアナログからデジタル機器に替わっており、アナログ育ちの私としてはこれらの機器を習熟するのにも四苦八苦しております。一緒にチームを組んでいる若者は、流石に覚えるのも早いです。

この芸術劇場は池袋という場所にあり、私にはとても都会で、毎日がお祭り騒ぎのように人が溢れかえっております。近くの池袋西口公園では朝早く通勤した時でも人の行列があり、夜遅く帰る時も人の行列があります。今までこのような光景はあまり見たことがなく、はじめの頃はとても驚いたものでした、今ではこの光景が馴染んでしまいましたが！しかしこの公園は本当にイベントやお祭りが頻繁に行われており、此处を通るたびになんだかウキウキします。

上京する前はいろいろな方にお話を頂きました。この年になって東京は大変だよとか、物価が高いよとか、地震が多く危険だよ、放射能で大変だよとかありがたい言葉を頂きました。しかしどこに行っても自分が後で後悔しないようにすることが一番かなと思い、多くの方々に迷惑をかけつつも自分の想いを通してしまいました。これからも色々な仕事に関わっていったらと思っております、自分で限界を決めてしまうことは簡単ですが、いつまでも挑戦して行くことが大事かなと思っております。

いつも三日坊主で長続きしない私ですが上京して絶対続けて行こうと思い実行している事がFacebookに毎日何でもいいので書き続けようということです。皆さんも一度覗きにきて頂き意見を頂けると幸いです。

まだまだこれからです、次を目指して頑張っていこうと思います。

---

## イベントのお知らせ

### ■「営利・宣伝目的利用」の貸し出しに関するアンケートの実施

幕内瓦版では、「営利・宣伝目的利用」のアンケートを実施します。皆さんの関係する劇場でも、企業・団体等の営業活動・宣伝のために行う催事などは、「営利・宣伝目的利用」として、

一般の貸し出しと区別され、その利用料金なども異なることがあります。本瓦版で、その基準や運用で悩む方からの提案もあり、今回の実施となりました。詳細は添付のアンケート用紙をご覧ください、メールで回答をご返信ください。

みなさんの業務に大に関わることです。ご協力よろしくお願いします。

## ■ JAZZ in FUCHU 支援プロジェクトについて

JAZZ in FUCHUは東京都府中市内で開催され、109バンドが25会場で演奏するというイベントです。

このイベントは市民のボランティアによって企画・運営され、運営費は市民からの寄付金と演奏者一人1,000円の負担金で賄います。

日本劇場技術者連盟は一般社団法人日本音響家協会と共同で、このイベントを支援するプロジェクトを立ち上げました。

私たちのプロジェクトは、府中市の大国魂神社正面のけやき並木通りに設けた2つのステージを担当します。私たちは、爆音を鳴らして地域住民が眉をひそめて通りすぎてしまうようなジャズフェスティバルから脱皮したいと考えているのです。当たり前のことですが、ジャズの最適音量により、騒々しい音ではなく、遠くで聞いても心地よい音を創造します。

そのためには、劇場などのように見栄え優先で演奏者が離れて演奏するのではなく、演奏しやすい位置で演奏し、モニタースピーカは使用せずに、試みとしてPAスピーカをバンドの後方に配置することにしました。

そこで、ハウリングしにくいスピーカをボーズ株式会社からL1、株式会社エヌエスイーからwrapping speakerを提供していただきます。

JAZZ in FUCHU 公式サイトは「JAZZ in FUCHU」で検索して下さい。

◎開催日；2012年10月14日（日）11時スタート

◎担当ステージ；フォーリスけやき広場／府中駅北口

---

## 連盟からのお知らせ

### ■Facebook「日本劇場技術者連盟ラウンジ」で交流を！

Facebookの「日本劇場技術者連盟ラウンジ」に気軽に書き込みをして、情報交換をしてみたいかがでしょう。

まずは、連盟ウェブサイトのトップページ (<http://www.teec-or.com/>) から「日本劇場技術者連盟ラウンジ (Facebookで交流)」をクリックしてください。

---

発行日：2012年10月1日

発行：日本劇場技術者連盟

発行人：齋藤 譲一

編集人：平野 克明

編集委員：阿部喜一・小松正俊・桑原基弘・庄司 至・増田哲也・山下祐治

# 幕内瓦版 第拾八号

電子版 発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

## ■ JAZZ in FUCHU 支援プロジェクトの報告

日本劇場技術者連盟副理事長 八板 賢二郎

2012年10月14日に東京・府中市で開催されたJAZZ in FUCHU（けやき音楽祭）を、日本劇場技術者連盟は日本音響家協会と共に支援をしました。

支援とはいえ、これは初めての試みであり、大きな賭けでした。

そもそも、舞台の音響（PA）というものが注目されたのは、1970年の大阪万国博覧会以降です。徐々に大音量を出せる機材が開発され、競って大きな音を出すことが音響技術者の生業となりました。

日本音響家協会は、SRという言葉を読み出し、音楽ジャンルごとに適した音量でPAすることを普及させようとさまざまなイベントを開催してきました。

しかし、どうでしょう。市民祭りなどでは、爆音で日本舞踊を踊るなど、ますます公共の場の音は酷くなる一方です。

JAZZ in FUCHUの音響支援を実行委員会から依頼され、幹部とお会いして支援する条件として、“市民にとって心地よいジャズを創造すること”を提案しました。これまで、ストリート演奏で商店街から喧しいという苦情があったので、実行委員会は賛同してくれました。どうやら、苦情があっても音量を下げない音響業者ばかりで閉口していたらしいのです。そこには、大音量を出さなければ、そして、機材を多く使わなければ儲からないという考えが横行しているからです。また、ロックとジャズの音作りを混同させているのです。

そこから脱却しようとしたのが今回の試みで、成功するか失敗するかは五分五分でした。

ボランティアの支援スタッフを募集したところ多くの申し出がありました。その支援の結果、どうにか2つの会場の音響は高く評価される結果となりました。

“モニタースピーカは無し、SRスピーカは演奏者の後ろから”という常識破りのプランでしたが、結局、ステージの周囲に集まった観客にだけ聞かせる音は、ほとんど生でした。生といっても電気楽器は演奏者が持参したアンプからの音です。それも、ときどき音量を下げてもらいました。このようにして作り上げたジャズの音は、とても心地よいもので、観客もスタッフも酔い痴れていました。

そこで気付かされたのは「生の音に優る音は無い」ということで、PAや録音というのは「いかに生らしく聞かせるかの技」なのだ・・・

ただ、サポーターから「これじゃ金とれない」という声が聞こえてきて、寂し



い思いをしました。やはり、音響業界は大音量と余計な機材を使わないと儲けることができないのでしょうか。

今年は10月27日(日)に開催します。劇場技術者にとってお忙しい時期ではありますが、お金では買えないワクワク気分を味わうためにご参加ください。

## ●JAZZ in FUCHU 支援プロジェクトに参加して

埼玉県 米本 麻紀子

「JAZZ in FUCHU」支援プロジェクトに、音響サポーターとして参加させて頂きました。

当日、朝はやや曇り気味だったものの、秋らしい天候で、待ち合わせ時刻の9時には、八板副理事長のもとに総勢17名のメンバーが集まり、第2ステージ組と第6ステージ組に分かれ、揃いのTシャツを着用し仕込みに入りました。私は第6ステージに配属されましたが、8月の宮城の技術者検定で初めて音響機材に触れてからまだ2度目のマイク設営でしたもので、緊張しつつ、何とか皆さんの足手まといにならないようにと思っておりました。

第6ステージは11時から18時の間に6団体が演奏を行いましたので、仕込みとバラシを6回繰り返したことになりますが、初めはマイクケーブルも全然さばけず、すぐからまってしまい情けない思いをしました。でも、一緒にいらした日本音響家協会北陸支部の西畠氏のマイク仕込み方とその動きがとても綺麗で、ああ動けば良いのか！と見よう見まねで動いてみたところ、少しポイントが分かってきました、本当に有難かったです。

3回目のバンドでは極端にマイクの本数が減りまして、何となく安心していたら内容がゴスペルコーラスで、これから40もの人が来ると聞いて、慌ててマイクやケーブルの配置を変えました。また、5回目のサルサのバンドでは大勢のお客さまがバンドの前に出て踊り出したので、舞台前に配線してあったケーブルを演奏中に舞台奥側に移動しました。このように音響さんも、予測して準備しても必ずしもその通りに行くわけではなく、舞台監督と同じように演奏者とのコミュニケーションや臨機応変さが求められるのだなと感じました。

第6会場の床はタイル貼りだったため、目地からケーブルがずれていると客席側から見て意外に目立ち、なるべく目地に沿って綺麗に配線できるように気を配っていました。

3組目のバンド演奏後から雨が降り始め、サポートメンバーも実行委員会の皆さんを手伝ってステージ上にテントを増設し、その後のステージに臨みました。

最後のバラシでは8の字巻きも多少楽にできるようになりましたが、より丁寧に、よりスピードを上げて出来るように練習しておきたいと思いました。

---

## ■音のゼミナール「コンプレッサーで音に彩りを！」

～コンプレッサーで心地よい音を創り出す秘めたる職人技の講習会～【報告】

2012年12月10日(月) 14:30～16:30 於 東京都 新宿文化センター

群馬県 平野 克明

コンプレッサーとリミッターの違いは？と問われて即答できる方は少ないと思う。まして、コンプレッサー(以下コンプ)を駆使して自分の思い通りの音を作ることなどできるのか？

今回は、そのような疑問への解答と共に、コンプを自在に操り音楽に彩りを加え、原曲の魅力さをさらに引き出すテクニックをサウンドエンジニア、昆布佳久（こんぶ よしひさ）氏に教えていただいた。

昆布氏は、NHKの放送技術に長年携わり、多くの内外の有名なミュージシャンの楽曲のミックスも手がけた実力ある技術者である。現在は、株式会社総合舞台の音響部で活躍されている。本セミナーでは、その実践的で貴重なノウハウを惜しみなく伝授していただいた。レベルの高い音響技術者でないと難解な部分も多かったが、目から鱗が落ちるほどの勉強になった。



最初に、コンプの有り無しによる音の変化を確認した。本来ならコンプ処理前の素材に対してコンプを掛けたものとの比較となるのだが、今回は実験素材として、既にマスターコンプ処理（この場合はたいていリミッターも併用される）が行われた音源を使用した。実験はこれに再度コンプを掛けるのではなく、反対に

コンプ等で処理される前の「アーティストやミキシングエンジニアが本来表現したかったであろう音」を昆布氏がシミュレーションしたものとを比較した。シミュレーションは、圧縮されていると思われる箇所をフェーダーで持ち上げる操作をDAW（Pro Tools に代表されるミキシングソフト）で行なうという非常に手間のかかる手法を使っている。

※注）DAWでは、人間のフェーダーさばきでは不可能な高速の動きも、ソフトの画面上で入力設定することで可能になる。

使用された音源は、アナログコンプで処理された往年の大歌手のポピュラーとデジタルリミッターで処理された人気歌手のセミクラシック曲の2曲。両者に共通しているのは、マスタリングの際に記録媒体に詰め込むことを優先するあまり、コンプやリミッターが音楽的には好ましくない使われ方をしたために、元の音楽が持つ抑揚が不自然になっていることである。平たく言えばコンプ／リミッターの悪い見本である。

これと昆布氏がシミュレーションしたものとを比較して聴いてみるとその差は歴然で、どちらの楽曲も元の音源よりもダイナミックレンジが広がり、それぞれのボーカル、ビッグバンド、オーケストラのサウンドにメリハリが生まれ、のびやかなイメージの音楽に変わっていて驚愕を覚えた。これがコンプ処理前の本来の「音楽」であり、逆に言えば、リミッターやコンプを不適切に使ったことでアーティストが表現したかった「音楽」が損なわれていることがわかる。コンプ等の不適切な処理の怖さである。昨今、CDが売れないとの声も聞かれるが、その一因がこうした不適切なリミッター等による「感動を味わえないCD」にあるのではないかとも思われる。セミナーの中では、古くからの定番的な使い方が、実はやってしまいがちな不適切な設定であることが解説された後、音楽の持つ「ダイナミックレンジのイメージ」を殺さないままに確実にダイナミックレンジを圧縮する設定がグラフや数値で解説された。

他にも、ピーク等を潰すというコンプ等への古典的なイメージとは正反対の「ピークをより際立たせる」設定など「コンプで音に彩りを！」与えることができるような使い方が幾つか紹介された。とにかく、コンプの使い方次第で、こんなこともできるのかと認識を改めた。

いくつかのツボについて学んだが、特に、アタックタイムの設定次第で、アタックを強調して「音が前に出る」ことや音源に応じたリリースタイムの設定値の概算方法などはなるほど思った。これらの説明で、コンプレッサー等のパラメーター設定の実際を知ることができ大変勉強になった。

さて、冒頭の疑問への解答だが、コンプとリミッターは、少しラフな表現を許していただくなら「フェーダーによる音量調整を超高速で行うための『フェーダーの代用回路』」といっても差し支えない。ミキシング、メディアへの記録、伝送などにそれぞれに携わるエンジニア達が欲した目的のために反応速度や圧縮比などを変えていった結果、コンプとリミッターの2種類に枝分かれしたとも思われる。ハード的には大差はない。

さて理想的なリミッターは？との質問に対して、「音色は変わらずに確実にピークを潰してくれるもの」というエンジニアは多いと思う。ではコンプの場合にも、これは当てはまるであろうか？それは必ずしもそうではない。コンプの場合にはセミナーで紹介されたように、ダイナミックレンジを圧縮するという本来の目的のみならず、演奏のアタック感を強調したり、音色を変えたりといった使い方なども可能である。だから理想のコンプとは「使用者の思い通りに音を変化（へんげ）させてくれるもの」かもしれない。まさにこの点にこそリミッターとコンプの違いがあると言えるのではないだろうか。

セミナーの中では、コンプ等とは直接関係ないが「歪」の効果的な使い方と作り方なども、昆布氏の実際の放送局での経験を交えながらのお話でとても面白かった。特に、爆発音や「のど自慢」の番組での「割れるような拍手」の音の作り方は、音響技術の経験がない者でも理解できる内容であり、かつ、現場で応用できそうなものもあり、大変有益であった。

最後に、コンサートの収録を得意とする昆布氏がミックスした音源をいくつか聴いた中で、南アフリカのレゲエミュージシャンの演奏を収録したアカペラ曲は、機械的なエフェクトを用いずに、ホールトーン（＝演奏会場のありのままの響き）を効果的に活かした録音であった。この作品に「音楽」が持つ強いメッセージを感じて皆が感動していた。

セミナー後に、コモドマッティーナ社様のご厚意によって今回使用したALLEN & HEATH 社製のデジタル音響調整卓や周辺機器の説明もあった。機種によっては、取説も不要なほど簡単に使用できるということが魅力的であった。

## ●交流会

講習会后、恒例の交流会が、忘年会として催され、多くの受講者が参加され大いに盛り上がった。講師の昆布氏も参加されて、様々な話題で楽しく時間を過ごすことができた。特に、昆布氏が音作りで意識していることは「不安定」であるというお話は、求道者としての矜持を感じると共に非常に興味深かった。それが意味することは次のようになる。ミキシングにおいて最近の音は、安定しすぎていて面白味に欠けるものが多い。不安定な一部分の調整はそれ単独では不安定なままだが、連続することにより安定が生まれる。それが音に魅力を与えるということである。

また、齋藤理事長や八板副理事長ともじっくりお話ができたが、その中で印象的だったのは、人とのつながりの大切さであった。今回のような講座や検定も含め、連盟や日本音響家協会の会員とのコミュニケーションの中から様々な活動が生まれてきている。決して、個人一人だけの力

では、これらのすばらしい活動はなしえない。つまり、それは“多くの人のつながり”によって可能になるのであるということだった。

そのようなつながりを醸成する場として、交流会は重要であると感じた次第である。実際、八板副理事長と昆布氏が酒宴の席で意気投合して実現したのが、今回の講座であったからだ。

多くの方に交流会には参加していただきたい。必ず、いい出会いがあり、さまざまな意味で変革のきっかけがつかめるからだ。

---

## ■ 営利・宣伝目的利用の貸出しに関するアンケートについて

昨年12月に集計結果をお知らせした標記アンケートは、技術者にとって専門分野ではない事柄でしたが、多くの方に熱心にご協力いただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、この類のアンケートとしては、非常に実際の事例や意見を盛り込むことができました。多くの方に周知していただき、今後の貸出業務や現場で、活用されることを期待します。

また、本アンケートへの感想やご意見もお待ちしています。さらに、みなさまからのこんなアンケートを実施して欲しいというご提案もお待ちしています。

宛先：幕内瓦版編集部 [teec.editor@gmail.com](mailto:teec.editor@gmail.com)

---

## 連盟会員の新鮮便

### ■ こわしちゃいました

茨城県 阿部 喜一

「反響板を壊してしまいました。」というネットの書込みがありました。ピアノ教室の先生が主催した教室の発表会で「緞帳を降ろそうとしたら反響板に当たって壊してしまった」というものでした。「休館日で会場スタッフはいなかった」ので、そのまま発表会を行ったということです。

この書込みだけでは破損の程度などがわかりませんが、会員のみなさんならいろいろと想像してしまうことでしょう。

- ・舞台スタッフ不在で貸し館をしていたの？
- ・先生に緞帳操作をさせていたの？
- ・本番を続行して危険はなかったの？
- ・管理者は責任を感じているの？
- ・まさか「弁償しろ」なんて言われてないよね？

そして、その先生は反響板が壊れて「みなさんには驚かせてしまって申し訳ない」とだけコメントしています。先生も事の重大さに気付いてない様子です。

私の近隣の公立劇場でも、土日祭日は職員不在で「シルバーさんが鍵を開け」「主催が緞帳を操作する」というところがありました。「予算がないから」「稼働が少ないから」などという理由で危険な劇場は全国にどれくらいあるのでしょうか。

少し前まで「福社会館」という名称で、小さな劇場が増えたように思います。「福祉」目的にすれば反対にあわずにハコモノが作れるということでしょうか。そんな劇場機能を持った「福社会館」には劇場技術者がいないことが多いようです。

劇場の管理者に危機意識を求めることも大事ですが、「劇場技術者がいなければいけない場所」の定義を明確にして、法整備をしていく等の活動が必要ではないでしょうか。

## ■目の毒？

福井県 山下 祐治

照明スポットの当り合わせで、パーライトなどの強い光源を直接見て合わせる方々が多いと思います。私もそうしていましたが、ここ数年の間に原因は不明ながら飛蚊症（ひぶんしょう）に悩まされ始め、モヤモヤしたものが視界を漂っていて非常に見にくくなっています。その原因が「光源を見ていたから」と断定は出来ませんが、特に若い方々には十分に注意をして欲しいと思います。老眼とも言えるのですが・・・

## ■テレビの音

北海道深川市 坪田 栄藏

会員のみなさんは、年末・年始はイベントで忙しかった方が多いのではないのでしょうか。私の街ではイベント関係はほとんどが公共施設での開催のためか、年末年始休館により家でのおんぼり過ごさせていただきました。（大雪による除雪以外は）

さて、そんな年末の楽しみは、昔から大晦日のテレビ放送の「レコード大賞」と「NHK 紅白歌合戦」です。最近「レコード大賞」は大晦日ではなくなったので、今では「紅白歌合戦」でしょうか。そのテレビ放送で現在の地上デジタル放送が始まる前は、私の街ではNHKのみがステレオ放送をやっており、そのため「紅白歌合戦」の広がりがある音は気持ちよく（音声ワイド機能によるものかも？）、地上デジタル放送では全ての番組がステレオ化されると共にダイナミックスの広い音になることをとても楽しみにしていました。

そして、その地上デジタル放送も始まって数年経ちましたが、その楽しみにしていた音が今どう感じるかという、意外にそうではないのです。トーク番組などは逆に聞き取りづらい感じもあります。ダイナミクスが広く、アナログ放送時のように音量があまり圧縮されていないために、小さな声が聞き取りづらいのか、番組により音量の違いがあるためなのか。それとも自分の耳の老化が進んでしまったのか。少し悩んでいたところです。

そんな時にテレビを良く見ると、アナログテレビではブラウン管の横にあったスピーカーがないのです。それでは液晶テレビはどこから音が出ているのかと、本体背面にスピーカーがありました。すなわち、音は壁に反射させて聴かせるのです。そして我が家ではテレビは部屋のコーナーに設置しており、これでは反射音が充分ではなく、明瞭に聞こえるはずがないのです。

そこで試しに、アナログテレビ時代に映画のDVDを良い音で観たいと思って買っていた小さく安いながらもサラウンドシステムがあったので、そこから音を出してみたら明瞭度も広がり感も増したのです。やはりスピーカーは前を向いてほしいところです。しかしながら、常時サラウンドのスイッチを入れるのも面倒で、結局「紅白歌合戦」のような限られた番組の時だけに使うようになっています。

そう言えば、擬似的サラウンドスピーカーが埋め込まれている「テレビ台」やテレビの下部に置く薄型の「シアタースピーカー（バー）」なる付属製品がメーカーから発売されています。これらを見ると、「テレビと一緒に揃えてください」というような、メーカーの下心がどうしても見え隠れします。さて、どうしたものか。メーカーさんスピーカーぐらい前に付けてもらえませんか。

## ■利用者からのご指摘

島根県スサノオホール 桑原 基紘

私が最近気になっていることは、当ホールを毎年ご利用いただいている方から「雰囲気変わったね」とご指摘いただいたことです。当然、職員体制が変わったため雰囲気に違いがでるのは不思議なことではありませんが、どのように変わったのか。使いづらくなったのか？それとも雰囲気が明るくなったのか？どちらにせよ利用者あつての我々『舞台技術者』有りきだと思うので、「雰囲気が変わった」から「雰囲気が良くなった」に変えて、「また利用したい」と言っていただけのようなホールを目指さねばと思っています。

舞台を利用される方は、必ず我々技術者と事前に打ち合わせを行い、リハーサルや本番当日も我々と顔を合わせます。つまり、舞台を使う方にとってはホールや舞台などを見る以上に技術者という“人”を見ていると思うので、そこでどういった印象を持たれるか、これは非常に重要なことだと思います。今後舞台業務の際には、利用者が使いやすいホール運営を今まで以上に視野に入れつつ従事していきたいと思っています。

## イベントのお知らせ

### ■第1種、第3種劇場技術者検定講座 大阪・貝塚市開催のお知らせ

- ◎ 日時：2013年2月21日（木）～22日（金）
- ◎ 会場：コスモシアター <http://www.cosmostheater.or.jp/access/access.html>
- ◎ 受講料 第1種 12,000円（会員8,000円）税込  
舞台進行を主としたプロのための検定で、照明と音響の基礎技能も学びます。  
第3種 4,000円（貝塚市民2,000円）税込  
市民を対象とした検定で、プロと一緒に受講して、舞台の仕事を理解していただきます。
- ◎ 問合せ・申し込み先 [kentei\\_3@cosmostheater.or.jp](mailto:kentei_3@cosmostheater.or.jp)  
氏名、住所、電話、メールアドレス、生年月日、検定種別を記入の上応募。
- ◎ 締切り：2013年1月31日

### ■劇場技術者寺子屋/音楽編 ステージマネージャーの仕事を学ぶ

クラシック音楽のコンサートなどで舞台進行を仕切るステマネと呼ばれるステージマネージャーの仕事の詳細について、第一線で活躍する内田陽子氏と山形裕久氏に講演していただきます。

◎内田陽子氏

福岡県出身。慶應義塾大学文学部卒業。

1996年株式会社テレビマンユニオン入社。

プロデューサー兼ツアーマネージャーとして『フェルメール・クアルテット』や『ジュリアード弦楽四重奏団』など国際的な弦楽四重奏団の来日公演に数多く携わる。『アマチュア室内楽フェスティバル』や『秋田ワールドゲームズ2001』といった国内外のイベントでの音楽制作の現場でも力量を発揮する。

◎山形裕久氏

一般財団法人貝塚市文化振興事業団 専務理事・業務執行理事、貝塚市民文化会館館長・劇場総監督／音楽プロデューサー。

有名アーティストのコンサートツアーの演出、舞台監督、舞台美術などを多数手がけている。

文化庁委嘱事業・芸術文化活動支援員、貝塚市吹奏楽団顧問、コスモス混声合唱団顧問、(社)全国公立文化施設協会／課題検討委員会・自主文化事業委員会委員、(財)地域創造／ステージラボ講師、日本舞台監督協会、日本音響家協会、日本照明家協会会員、日本劇場技術者連盟副理事長。

◎日時：2013年2月25日（月）14：30～16：30

◎ 会場：新宿文化センター 和会議室

◎ 受講料：2,000円（学生1,000円、主催/共催団体の会員と会友は無料）

◎問い合わせ・申し込み先：teec.honbu@gmail.com FAX. 042. 361-8982

氏名、会社名（学校名）、学生・連盟会員会友・SEAS 会員・埼舞協会員、交流会の出欠を明記してお申し込みください。

\*交流会を17時30分から開催。会費3,900円。（要事前申し込み）

## 連盟からのお知らせ

### ■Facebook「日本劇場技術者連盟ラウンジ」で交流を！

Facebookの「日本劇場技術者連盟ラウンジ」に気軽に書き込みをして、情報交換をしてみたいかがでしょう。

まずは、連盟ウェブサイトのトップページ (<http://www.teec-or.com/>) から「日本劇場技術者連盟ラウンジ (Facebook で交流)」をクリックしてください。

### ■Eメールアドレスの登録を！

当連盟では、Eメールのアドレスを登録された方には、いち早く、当連盟はもとより、様々な他団体のイベントの情報もお知らせしています。変更の際のご連絡もお忘れなく。

### ■会費納入のお願い

2012年度の会費を納入されていない方は、至急納入してください。会費は2,000円で、振込先は00180 - 7 - 540744（郵便局窓口で払込）、名義は日本劇場技術者連盟です。

発行日：2013年1月17日

発行：日本劇場技術者連盟

発行人：齋藤 譲一

編集人：平野 克明

編集委員：阿部喜一・小松正俊・桑原基弘・庄司 至・増田哲也・山下祐治